

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-53C	12-079	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
Influences of tobacco and alcohol use on hepatocellular carcinoma survival. 喫煙と飲酒が肝細胞がんの生存期間に及ぼす影響について		
執筆者		
Shih WL, Chang HC, Liaw YF, Lin SM, Lee SD, Chen PJ, Liu CJ, Lin CL, Yu MW		
掲載誌		
Int J Cancer. 2012 Dec 1;131(11):2612-21		
キーワード		
飲酒、喫煙、ウイルス性肝炎、肝細胞がん、生存率		
要旨		
目的： 肝細胞がんは、予後不良のがん種である。肝細胞がんの予後に影響しうる生活習慣についてはほとんど研究されていない。		
方法： 診断前の喫煙と飲酒が肝細胞がんの生存期間に影響を与えるか調べるために、ウイルス感染の状況で層別化して、1997-2004年に台湾の多施設共同研究に登録した2,273名(1,990名がウイルス性肝炎、283名が肝炎ウイルス陰性)の肝細胞がん発症者(20-75歳)を2007年まで追跡した前向きコホート研究を行った。ベースライン時に面接を行い、喫煙と飲酒の習慣について聞き取った。		
結果： 最長で10年間追跡したところ、1,757名が死亡し、そのうち1,488名(84.7%)が肝細胞がんによる死亡であった。診断前の喫煙、飲酒の習慣は、互いに、また他の臨床指標と独立して、予後を悪化させた。喫煙、飲酒の習慣はウイルス性肝炎由来の肝細胞がんのみに影響し、早期のステージでより影響が大きかった。46.2g/日以上飲酒かつ10箱年以上の喫煙で、非飲酒かつ非喫煙に対して、ハザード比HR=1.72, 95%CI 1.45-2.05であった。どちらの習慣も禁煙、禁酒により肝細胞がんの死亡率は低下し、10年以上の禁煙群は喫煙群に対してHR=0.77, 95%CI 0.61-0.97であり、10年以上の禁酒群は飲酒群に対してHR=0.74, 95%CI 0.56-0.98であった。		
結論： ウイルス性肝炎由来の肝細胞がん患者では、診断前の喫煙・飲酒歴は肝細胞がんの生存率を悪化させた。禁煙・禁酒により過剰なリスクを軽減できる可能性があるが、その効果には長期の禁煙・禁酒期間を要した。		